

## 絵 画

鎌倉の寺社を訪れたとき、もっとも目立つ存在といえば仏像かもしれませんが、そのほかにも絵画や工芸品、古文書など、実にさまざまなものが伝えられています。絵画は、お堂で常に使われているとは限りませんが、重要な儀式がおこなわれる際には堂内を彩ったり、時に儀式の本尊となったりと、たくさんの役割を果たしてきました。

鎌倉を代表する寺院である建長寺や円覚寺は、中国の僧侶を招いて開山とし、現地の最先端の仏教文化をそのまま移入することを目指しました。僧侶たちがもたらした大陸の絵画は、これまでの日本にはなかったような斬新な構図、柔らかくでありながら確かな描線、鮮烈な色彩など、大陸的な異国情緒ただようものでした。当時の鎌倉に生きた人々は、こうした絵画に瞬く間に魅了されたことでしょう。日本の絵師たちもまた、大陸の絵画に学び、新しい表現を育んでいきました。

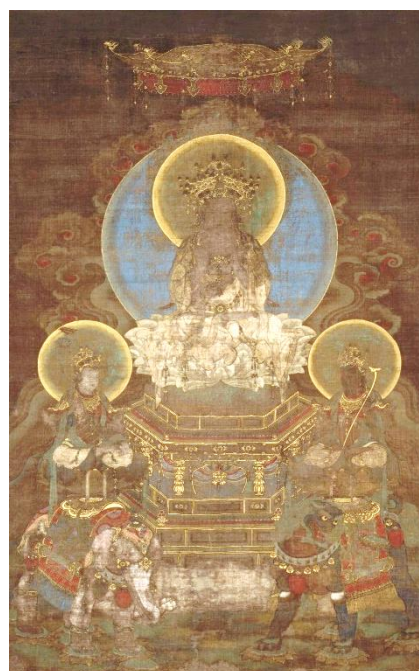


蘭溪道隆自賛像

国宝 建長寺蔵 鎌倉時代

縦 104.6×横 46.0cm

禅宗の僧侶の肖像画のことを頂相といいます。ここに描かれているのは、中国から日本へと渡り、建長寺の開山をつとめた蘭溪道隆（大覚禅師）です。蘭溪は文永9年（1272）に同寺で没しますが、この絵は存命中に描かれ、また画面上部の賛文も蘭溪本人によって記されました。



釈迦三尊像

重要文化財 建長寺蔵 中国・南宋時代

縦 133.0×横 82.3cm

中央に釈迦如来、向かって右に普賢菩薩、左に文殊菩薩を描いた図です。この作品は、日本ではなく中国で描かれたもので、建長寺の開山である蘭溪道隆が自身の来朝とともにもたらしたと考えられています。釈迦如来が宝冠を被る姿で描かれており、禅と華嚴の融合を伝えています。



当麻曼荼羅縁起絵巻（巻下） 国宝 光明寺蔵 鎌倉時代 縦 51.5×横 96.7cm

奈良・当麻寺の本尊である、綴織当麻曼荼羅（8世紀・唐時代）の織成伝説を語る絵巻です。仏法に篤く帰依した中將姫は、阿弥陀如来に一目出会うため、蓮糸を紡いで染め上げ、まばゆい浄土の様子をあらわした大きな曼荼羅を織り上げました。姫君の願いが果たされ、阿弥陀聖衆らに迎接される巻末の光景は、観るものに希望を与える至高のシーンです。



五百羅漢図

円覚寺蔵 全 50 幅

(重要文化財 33 幅 神奈川県指定文化財 16 幅 鎌倉市指定文化財 1 幅)

掲載は室町時代 縦 159.9×横 90.5cm

釈迦の弟子である羅漢は、釈迦の伝法の活動を支え、その教えを守っていくために心身を捧げた聖なる存在です。神通力を発揮したり、動物と対話したりする姿など、神秘的なさまが数多く描かれます。一見すると僧侶にも見える羅漢ですが、仏道修行を实践する様子は、現実の僧侶たちのお手本にもなりました。



束帯天神像

鎌倉市指定文化財 荏柄天神社蔵

鎌倉時代 縦 189.5×横 135.0cm

平安時代、菅原道真は悲運のなか大宰府で没しますが、人々は彼が怨霊となって祟ることを恐れ、「天神」として祀るようになりました。天神信仰は全国に広がり、鎌倉地域にも独自の天神縁起が伝えられました。本作のような大幅の天神画像が飛来した場所に建立されたのが、荏柄天神社だと縁起に説かれます。